

ネパールの風

98・ネパール日記 その・4

後藤 隆徳

(前号のつづき・一部書き替えました)

子供は最初遠慮し勝ちだったが、段々と慣れ親しみ次第に甘え、ジャレ、遊び、すっかり高岡の「孫」と化してしまった。回りに同じくらいの子供がいないので可哀相だ。

ここで高岡は私が買ったのと同じショルダー・バックを購入した。このものは、同じデザインでも糸が断然細いので、手触りがしなやかで柔らかい。粘りに粘ってかなりまけさせた。夕食後4人テントで軽く飲んで反省会。

第4日目 4月26日(日) 晴のち雨 バンブー (2230m) 7:20~ゴラタ
ベラ (3010m) 14:40

後藤39度の発熱カトマンドゥへ下山か？

朝のランタン・コーラの流れは静かだった。氷河を源とする河は夜間気温が下がると融氷・雪が少なく、結果下流の流れは穏やかとなる。

例によってキッチン・ボーイがモーニング・ティーと洗顔用のお湯を届けてくれる。朝食はすでに5時頃起床したコック、キッチン・ボーイによって作られている。そして、我々が朝食を済ませ出発する頃にはポーターは全て出発した後で誰もいない。ヒマラヤ・トレッキングとは、いたせりつくせりの世界なのだ。全て自身が行う日本の冬山の方が余程大変である。故にヒマラヤ・トレッキングにはまってしまう人もいる訳だ。

ここでトレッキングの1日の流れを具体的に見てみよう。まず前述の如く朝はモーニング・ティーで始まる。ティーはミルク、紅茶、白湯、クッキーが出る。お茶を飲み洗顔を済ませたらポーターに運んでもらう個人装備をまとめてテントの前に出して置く。あとは朝食が出来るまで散歩したり、朝日に輝く山々をのんびり眺めていれば良い。

7時頃朝食となり、その間シェルパ達がテントを撤収し荷造りをし先に出発する。朝食が終わればサブ・ザックひとつでトレッキングが始まる。写真を撮ったり、花や鳥を観察しながら、のんびりゆっくり進む。あまりのゆっくりさに、調子が狂う場合もある。しか

し、4千mを越えた場合は1日で登る標高差は500m以内とし、なるべくゆっくり登るほうが良いといわれる。順化（順応）は登る山が8千mでも6千mでも同じで、4千mからキッチリやらなければならない。例えば、登る山が低い6千m級の山と甘く見ると、後で取り返しのつかないことになるのがヒマラヤ登山だ。

そして、3時間も歩けば腹が空いてなくも、そろそろ昼食だ。先行したコック、キッチン・ボーイが昼食の支度を半ば終えている。シートに腰を降ろせばジュースやお茶が運ばれる。近くのロッジにはビアも有る。スケジュールは11時頃着いて13時頃出発するのが標準的だ。午後のトレッキングを再開して3時間も歩けば、もうこの日のキャンプ地に到着する。キャンプ地には既にテントが設営され、中には厚手のマットが敷かれ、シュラフが広げられている。ポーターに預けた個人装備はテントの入り口に置かれている。テントは4人用を2人で使用するので十分な広さだ。ただ、寒いときは荷物を一つのテントにまとめて、仲間4人で入るのも暖かくする工夫のうちだ。

テントに入り一息ついていると、またキッチン・ボーイがお茶を運んでくる。キャンプ地には16時頃着き、夕食は18時頃となる。夕食が済めばあまりやることはない。仲間がいれば一杯やりながら今日一日を振り返るのも良し。記録をつけるのも良し。B・C（ベース・キャンプ）までトレッキングは毎日こんな調子で進んでいく。



亜熱帯のジャングルっぽい中を進む。左手のランタン・コーラの右岸に穂高の屏風岩みたいな大きな岩壁があり、サボテンのような植物が沢山生えていた。花が咲けばさぞ見事であろう。日本では見られない光景だった。

小さなアップ・ダウンを繰り返して進むと立派な吊り橋が現れ、ランタン・コーラを右岸に渡る。谷間の向こうにランタン・リルンⅡが銀嶺を光らせる。渡った所のロッジで休憩。めずらしく小奇麗な親子がいたので許可をもらい写真を1枚撮らせてもらった。子供は恵まれているらしく物をねだらない。不思議なものでねだられないとあげたくなるのが人情。A隊のオバさんが飴をあげた。

道はここから急になりシャクナゲはますます見事になる。途中でロッジHotel・Langtang・Viewがあり立派な宿泊設備が整っていた。宿泊は千Rs（約2千円位）で、特に予約が無くても空いていれば宿泊出来るとのこと。明るい雰囲気感じのよいところだった。

程なく標高約2340mのLama・Hotelに着く。ここで昼食となる。ランタン谷の日当たりのよい広々とした場所に数軒のロッジが建っていた。菜の花が咲き乱れいかにも春爛漫という感じだった。

昼食が出来るまでビアを飲んだり、（今月号「きりぬき帳」参照・最新のニュースで8/16の朝日新聞によると、今後エベレスト周辺ではビン入りのビアを販売出来なくなると報じている。つまり、ビン入りのビアはアルミ缶と違い金にならないので回収されずい

たる所に山積みにされ、散乱し、それが環境に深刻な影響を与えている。確かに言われてみれば、ここでもバッチェの回りにはビア瓶がゴロゴロしている。今のところエベレスト周辺だけだが、いずれネパール全土に及ぶだろう。うまい瓶ビアが飲めなくなるのは残念だ。

裏山から流れる清水でシェルパと一緒に洗髪したり体を拭いた。清水はもの凄く冷たく気持ち良かった。しかし、これが後に最悪の結果を招くとは予想出来なかった。昼食が出来るまでA隊のタケダと話をした。彼は福岡から参加した私と同年配の方が話によると氏はすでに20数年前この地を訪れたことが有るという。もちろん当時は車道もなくカトマンドゥからは徒歩で来たという。

就職はしていなかったので時間はタププリあった。3ヶ月近くネパールを彷徨(さまよ)い歩いたという。今回再訪したのは「ネパールがどの程度変化したか見たかった」とのこと。現在でもこの程度だから当時は凄かっただろう。氏は聞いてもあまり積極的にその辺のことは話さなかったが、世の中には余裕のある人がいるものと思った。

昼食はまずラーメンを食べ、次に丸ごと出されたジャガイモにバターを塗ってかじったり、ソーセージとか、なかなかいけた。昼食後11時半再び出発。

この辺から一面シャクナゲの海が延々と続く。日本で見たことのない樹の大きさ、花の数、そして香り。花の色は真紅から徐々にピンクになり、やがて純白に変わっていく。ヒマラヤのシャクナゲは凄いと聞いていたが、とにかく日本とは規模が違う。これはこの地を訪れてみないと分からないことだ。かつてイギリス人登山家のティルマンによって「世界で最も美しい谷」と紹介されたというが、これもその一部であろう。

実はこの上の今日の宿泊地ゴラ・タベラ(Gh o r a・T a b e l a)までカトマンドゥからヘリコプターで一気に来るツアーもある。忙しく時間のない人には3日の短縮になる。しかし、初めてヒマラヤを訪れる人はやはりここを歩き、この自然を自分の眼で、手で、足で確かめてみたいものである。

途中の休憩所Gunnachokに着いた。ここの純白のシャクナゲは特に見事。男の人が竹を削ってドッコのようなカゴを作っていた。写真を撮るべく許可を求めるとハッキリと断られた。



ランタン・コーラ沿いのシャクナゲの森を更に登っていくと、途中でA隊がバッチェの庭でシェルパ・ダンスを興じていた。加藤たまらず、間髪を入れず踊りの輪に加わる。普通、このシェルパ・ダンスは夕食が終わると一日の「締め」としてシェルパが必ず行う「儀式」なのだが、娯楽の少ない山中に置いてはストレスを発散し、コミュニケーションを図る貴重なものとなる。

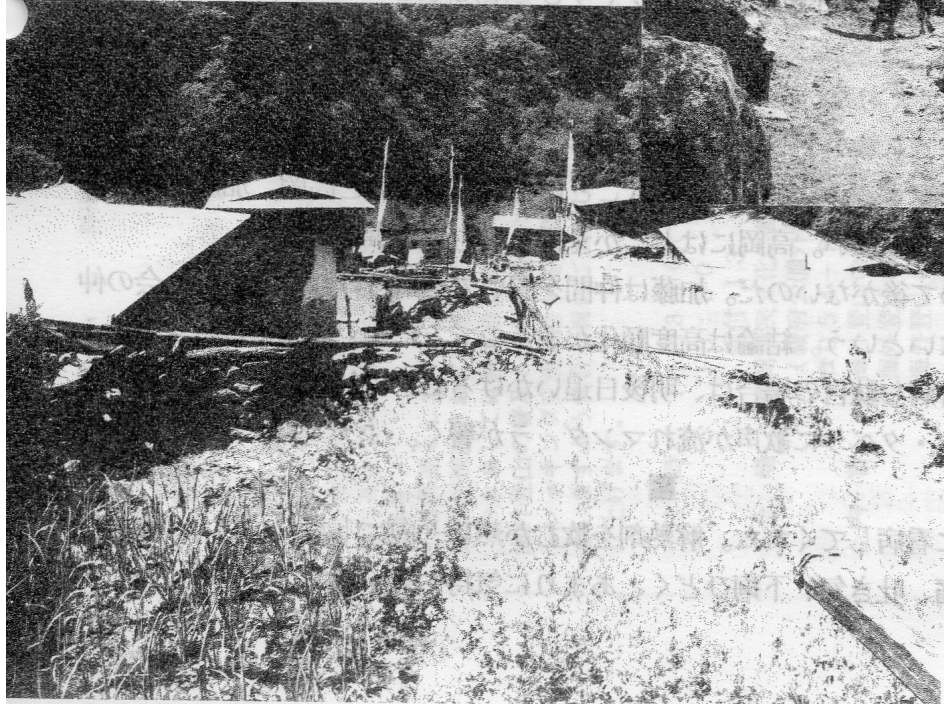
マダーラという小さな太鼓とハーモニカで演奏して全員が歌う。特に踊り方は無いようだが、腕を大きく広げ体をくねらせながら、優雅にのびやかにステップを踏む。相方が



(上) ラマホテルへのシクナケ街道

(中) 段々と高い山が近づいてくる
暑いので陽がさすを怖くカト-

(下) 菜の花満開のラマホテル
タルキョーが鯉のぼりみたい



入ると背中をこすり合わせる様に踊る。

マンダラは小さな太鼓だが良く響き、我々が寝静まった後もあの独特のバスをいつまでも響かしていた。今度の隊ではB隊担当のニマの踊りが一番上手かった。お別れパーティーではその情熱的な「舞」に圧倒された。加藤の話では「眼が引っくり返り白目で恍惚としていた」という。我々も真似をして踊ったがやはり本物は違う。

唯一、知っている曲は日本でも良く歌われる「レッサム・ピリリ」。これはシェルパも好きらしく何回も唄った。フレーズの終わりに必ず「レッサム・ピリリー、レッサム・ピリリー・・・」とリフレインし、永遠に続きなかなか終わらないのである。

左岸の大崩壊地を見ながらシャクナゲの森を抜けると、標高3010mのゴラタベラに着いた。俄に雨雲が漂い冷たい風が吹き抜ける。ネパールに来て初めての雨だった。こちらの天気は午後気温が上がると必ず雲が湧き展望はなくなる。夜になり気温が下がると星が見えるという具合だ。



隊荷はまだ着かず寒いのでトレーナーを着てロッジに入り暖を取る。何かイヤに寒く小刻みに震える。テントが設営された。中に入り厚着をする。4人で雑談をしビアを何杯か飲んだ。ところが自分の意思ではどうにもならない大きな震えと寒けが3回襲う。おかしい。何か変だ。いつもと違う……。急に気分が悪くなりそのまま横になってしまった。体温を計ると38度2分あった。

気持ちが悪く夕食は食べれなかった。こんなことは山に登って33年なかつたことだ。どうしたのか……。風邪を引いたのだろうか。思い当たるのは昼間冷水で頭を洗ったことだが、疲れが溜まっていたのだろうか。この高度では高山病はないはずだ。やっぱり風邪か……。それともバチが当たったのか。いつも自分だけ山に登って。そんなはずはない。俺だって今回は勤続褒賞の特別休暇をやりくりして来たんだ……。何故かしきりに日本の事が気になった。……。

3人は非常に心配してくれた。それはそうだ。音頭を取った私がコケたら路頭に迷う。とりあえず明日になっても熱が下がらなかった場合、3人には行ってもらい私はここで1日様子を見ることを提案する。しかし、そんなことは絶対出来ないと言われ、高岡、加藤は言ってくれた。だが、そうもいかない。高岡にはとにかく行ってもらおう事にする。

高岡は年齢からいつて後がないのだ。加藤は仲間を置いて絶対行けないという。会の仲間とはそんなものでないという。結論は高度順化があるのでとにかく高岡には行ってもらおう。加藤は明日1日看病し駄目な場合は、明後日追いかけることにした。シェルパの「儀式」が始まった。ゴラ・タベラに歌声が流れマンダラが響く。



加藤と高岡が寝ずに看病してくれた。解熱剤を飲むが熱は一向に下がらない。39度2分まで上がった。頭痛、吐き気、下痢ひどく、あまりに気持ち悪く息も苦しいのでシコダ

に酸素を頼む。サーダーとテントに持ってきてくれマスクを当てがうか何故か酸素は出ない。どうも使い方が良く分からないらしい。(このド素人がしっかりせんかい。それでもプロか。緊急の場合どうする)と心の中で叫ぶ。2人は10分程で帰った。あまり心配している様子は無い。ツアー会社ではこんなものか。やっぱり頼りになるのは仲間だ。

少しウトウトした。加藤の看病は続く。全く寝ていない。迷惑を掛けたと思った。そしてもし仲間がいなかったらと思うとゾットした。生涯で最悪の夜は更けていった。

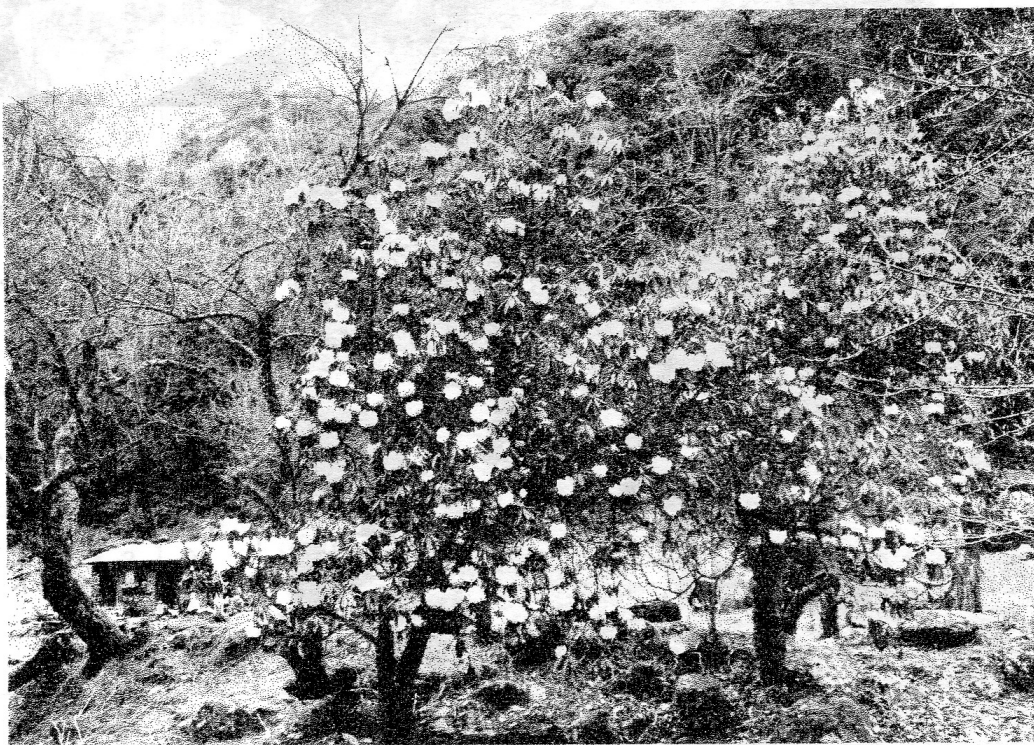
第5日目 4月27日(晴) 高岡・今泉(A・B隊)ゴラ・タベラ7:20~キ
気温8度 ャンジュン・ゴンバ15:50
後藤・加藤ゴラ・タベラにて1日停滞

熱は下がらず、ネパールの人情にふれる

最悪の夜は長かった。朝になっても熱は依然37度6分あり、朝食は摂れず下痢もひどく気分は全く優れなかった。高岡、今泉には明日の再会を約し予定通り先行してもらおう。それが私の意思だった。今泉に高岡をくれぐれもよろしくと頼む。

隊は出発した。いろいろな思いが頭を巡った。このまま熱が下がらなかつたらカトマンドゥに下山するのだろうか。よりによってこんな時に……。入院してどこも登らず、おめおめと日本に帰れるだろうか。その時は頭を丸めなきゃいかんだろうな……。昼になっても熱は一向に下がらなかった。(つづく)

ナマステ・ナマステ





(上) 余裕のA隊は
昼間からシェル
パックスを楽しむ

(中) 見事！なジャク
ケの森

(下) 3000mのゴラタベ
ラは高山の雰囲気
気がたえよう